



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	履修モデルから考えるグローバル人材育成プログラム： ハワイ文化研修2013 を核として
Author(s)	東矢, 光代
Citation	琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulletin(19): 129-132
Issue Date	2016-09
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41031">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41031</a>
Rights	

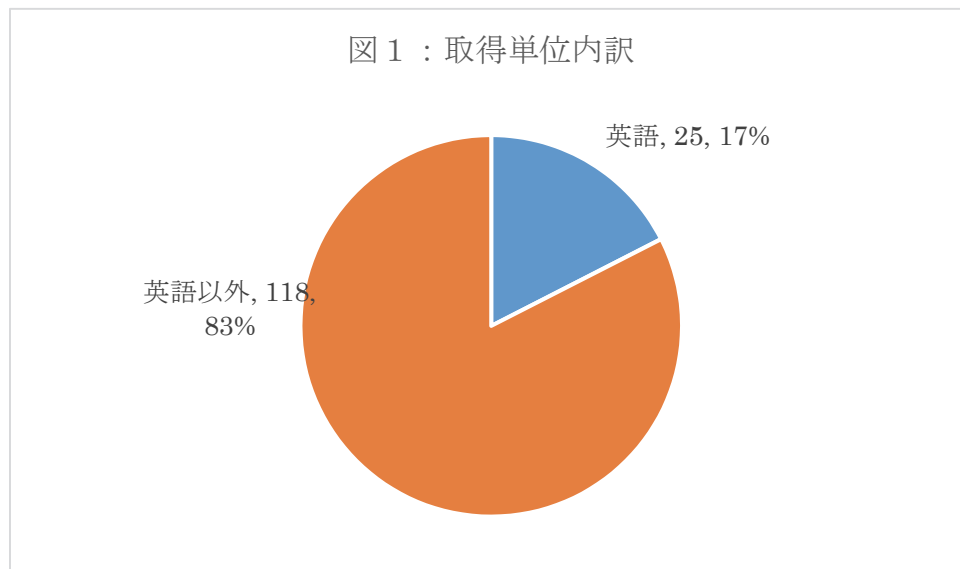
# 履修モデルから考えるグローバル人材育成プログラム ーハワイ文化研修 2013 を核としてー

法文学部 教授  
東矢光代

本稿では、2013年9月に実施したハワイ海外文化研修参加者の中で、在学中の科目履修を通して英語の学習に成功したと考えられる、学生Aの事例を報告し、その履修状況と資格試験による英語力の伸びから、グローバル人材の育成に資する、本学カリキュラムにおける履修モデルと海外文化研修の意義について考察する。

ここで事例として紹介する学生（Aくん）は、2012年度入学で、今年度（この原稿を執筆している平成28年3月）に本学を卒業した。個人情報に配慮し、専攻は「英語ではない」という記述にとどめる。Aくんは2年次前期に、共通教育科目「海外文化研修A（英語圏）：2単位」に登録し、2013年9月11日～28日の旅程で、他の20名の学生と共に、ハワイ大学の短期プログラムに参加した。引率した2名のネイティブスピーカー教員の評価でも、とても積極的でコミュニケーション能力が高く、現地においてもリーダーシップを発揮していたという。帰国後も英語の学習を継続し、引率教員との交流も続いている。今回、本人の理解と協力の元、履修状況などから、4年間を通じての英語学習のヒントを得たいと思い、履修状況等のデータ提供とインタビューから、分析を試みた。

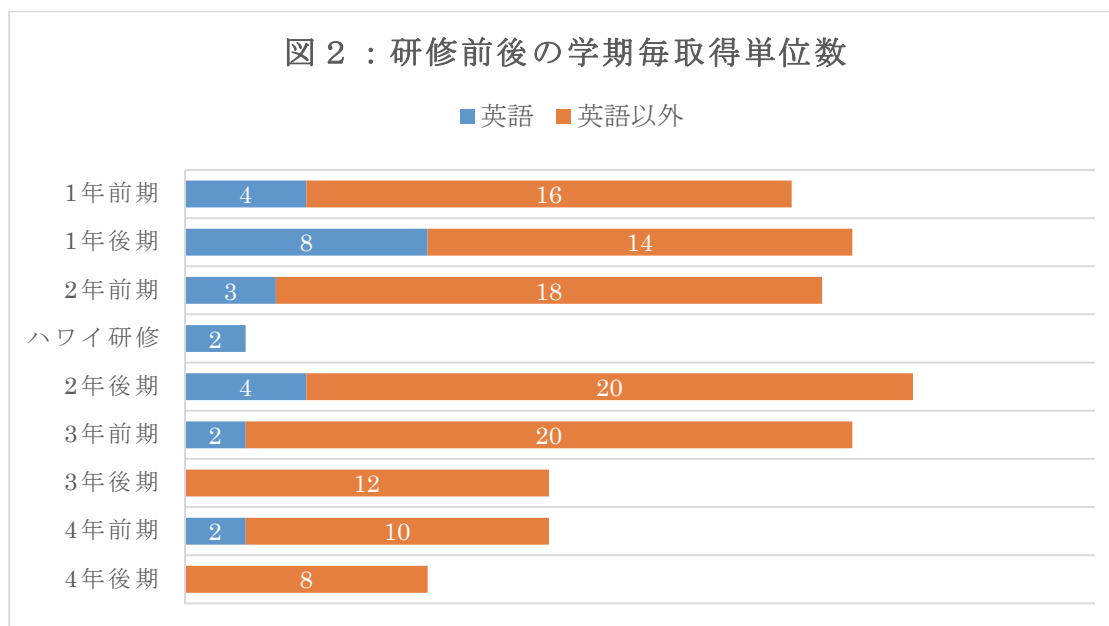
まず、4年間の取得単位数は143単位と多いのが特徴で、しかもその内の25単位（内2単位は海外文化研修）が英語科目の単位である（図1）。



これは全取得単位数の17.5%にあたる。卒業要件単位数が124単位で、多くの学部では8単位を英語（第1外国語）必修単位と定めているが、これは割合としては6.5%にしか過ぎず、12単位を必修として履修した場合でも9.7%であることから、Aくんが履修した英語科目単位数は、通常よりかなり多いと言える。

次に、学期ごとの単位取得状況を見てみる。英語と英語以外に分け、学期ごとの単位数を積み上げ

グラフに表わしてみた（図2）。ハワイの研修は2年前期と2年後期のはざまに位置づけられるため、あえて分けてグラフ化した。



\*棒グラフ内の数字は合計単位数を示す。

1年後期の英語取得単位数が、8単位と突出していることがわかり、ハワイ研修の前から英語の学習に積極的だったことが伺える。また、帰国後の2年後期にも4単位履修しており、その後、3年前期及び4年前期と継続して履修していることがわかった。

最後に、実際に履修した科目名を含め、学期ごとの履修状況を表1にまとめた。ここでは、本学で提供されている英語科目を、どのように選んで履修していったかが読み取れる。まず、1年の前期は通常の学生と同じく、「大学英語」（週2コマ）の4単位のみ履修であった。それが1年後期では、一気に「英語講読演習中級」「英会話演習中級」「英語プレゼンテーション中級」「TOEFL演習」（すべて週1コマ、2単位）の8単位となり、この学期は週に4回、英語の授業を受けていたことになる。共通教育の中級ものは全て取り終え、2年前期には「TOEIC演習」を登録したが、興味深いことに、この学期には、法文学部国際言語文化学科英語文化専攻の科目である「オーラルコミュニケーションⅠ」を履修している。つまりこの学期は週2回の英語の授業を受けると同時に、「海外文化研修A」への登録により、英語学習への動機づけが一段と高まったと言える。

この2年前期までで、ほとんどの共通教育英語科目を履修していたAくんだったが、帰国後は上級クラス（「英語講読演習上級」「英語プレゼンテーション上級」）で、週2コマ英語に触れていた。3年次に入ると専門科目が忙しくなったとのことであったが、それでも3年前期と4年前期に週1コマずつ、英語の授業を受けていたことになる。この時の履修科目は「メディアの英語Ⅰ」及び「英文和訳演習」であり、英語文化専攻の授業を受けていたことになる。すでに共通教育では、英語科目を9科目20単位履修しており、登録できる科目がほとんどなかったことから、英語文化専攻の科目を履修したという。

表1：学期ごとの英語科目履修状況

	全体取得 単位数	内 英語 単位数	共通教育 (単位)	英語文化専攻科目 (単位)
1 年前期	20	4	大学英語 (4)	
1 年後期	22	8	英語講読演習 中級 (2) 英会話演習 中級 (2) 英語プレゼンテーション 演習 中級 (2) TOEFL 演習 (2)	
2 年前期	21	3	TOEIC 演習 (2)	オーラルコミュニケーション I (1)
ハワイ 研修	2	2	海外文化研修 A (英語圏) (2)	
2 年後期	24	4	英語講読演習 上級 (2) 英語プレゼンテーション 演習 上級 (2)	
3 年前期	22	2		メディアの英語 I (2)
3 年後期	12	0		
4 年前期	12	2		英文和訳演習 (2)
4 年後期	8	0		
合計	143	25	20 単位	5 単位

このように見ていくと、Aくんが4年間を通じて英語学習への動機づけを維持し、しかも極めて有機的に、本学で履修できる英語科目を活用して履修していったことがわかる。1年後期に一気に履修した感はあるが、特に2年次後期までに、海外文化研修も含めて21単位分の英語科目を履修することで一定の英語力を確保し、専門科目で忙しくなる3,4年次は維持程度の履修であっても、自身の英語力向上を統制できているように見える。実際の英語力の変化を見てみよう。2013年度のハワイ研修参加学生は、渡航20日後 (Time 1) と4か月後 (Time 2) に学内TOEICを受験してもらった。またAくんには、卒業直前の今年 (2016年) 2月に再度学内TOEICを受験してもらった (Time 3)。その結果、Time 1で840点、Time 2で905点、そしてTime 3で920点という高得点であった。ちなみにNetAcademy 2を用いた短縮版のオンライン予想得点では、ハワイ研修渡航直前が600点、渡航直後が800点であった。リスニングとスピーキング測定のための、電話によるVersantテストの得点では、渡航直前と渡航直後は誤差程度の下降が見られたため、NA2のTOEICで測定したスコアの向上は、控えめに解釈する必要があるが、渡航後から2年半たった卒業の時点で、得点維持のみならず、さらに高得点を得ていることは特筆に値する。

しかし、この履修モデルだけでは見えない、Aくん特有の要因もある。Aくんにはインタビュー調査を行なったところ、高校時代に1年間、非英語圏への留学経験があることがわかった。語学ではかなり苦労したと語っていたが、大学入学後、そして在学中はハワイ研修以外にも、カリキュラム外で、海外との交流の機会を自ら複数回作り出していた。そのような中でのハワイ研修の位置づけ、ふり返

ってみての自己評価について尋ねたところ、その影響はとても大きかったと語ってくれた。大学入学前の海外経験は英語圏でなかったため、ハワイで自分の英語力が試せたこともよかったし、何より「アイデンティティ」について考える機会を得たことが、大きな収穫だったという。ハワイ研修後もその時に得た経験をしっかりと自分の中に落とし込むことで、Aくんは英語の学習を継続し、自信をもってその英語を駆使しつつ、さらに大学生活の残りの2年間では、学外の海外交流プログラムの企画・運営にも、ボランティアとして参加していたことが、インタビューを通じて明らかになった。

このように、グローバル人材の資質が理想的に形作られることは、幸運な偶然の産物であると言えないこともない。ただ、今回改めて履修状況を確認させてもらい、Aくんの履修プログラムにおいて、英語科目単位が、4年間にわたり通常より多く履修されていることを知った。それは図らずも、彼に続く多くの学生にとって有益な、履修モデルとして提示できるものである、という印象を強くした。そしてその中に、ハワイ文化研修が位置し、果たす役割も確認できた。2週間という短期間では、英語力そのものの伸長はそれほど期待できないにしても、英語を「実際に使う場」として位置づけ、英語力以外の学び（Aくんの場合は、それがアイデンティティであった）の経験を、その期待できる効果として、今後の履修モデルづくりの参考としたい。

\*本報告は、琉球大学中期計画達成プロジェクト「ラーニングアウトプット、アウトカム保証のグローバル人材育成6个学期外国語教育プログラム開発と試行」及びCOC事業「外国語教育・異文化理解のための継続学習プログラム」の成果の一部である。